弘前大学教育学部紀要　第124号：103～112（2020年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 124：103～112（Oct. 2020）

登校を渋る発達障害児の中学校進学をめぐる母親の心情に関する質的分析

A qualitative analysis of the mother's sentiment regarding going on to junior high for a girl with developmental disabilities who have been chronically absent from elementary school

増　田　貴　人*
Takahito MASUDA*

要　旨

本研究は、小学校への登校を渋っていた発達障害女児を育てる保護者の語りをとおして、児の中学校進学をめぐってどのようなことを考え、どのような心情を抱くのかを明らかにすることを目的とし、インタビュー結果を定性的に分析した。コーディングとカテゴリー化の結果、最終的に≪子どもの就学・将来≫、≪子どもの不登校≫、≪子どもの障害≫、≪母親としての自己≫、≪人的資源≫の５つが抽出された。発達障害児の就学をめぐる保護者の考え・心情は、就学に直結する話題にとどまらず、母親の現在の心境やそれを支えてくれる人的資源との関係に至るまで多岐にわたりそれぞれにポジティブ／ネガティブいずれの側面の心情が短いスパンのなかで絡み合い、アンビバレントに構成された複雑な様相を示していたが、その背景には、児の障害特性の受容過程で感じていた様々な心情が進路選択を機に再燃していたものと考えられた。

キーワード：発達障害、中学校への進学、定性的研究、両義的

１．背景と目的

子に障害が疑われる場合、母親が抱く育児負担感が障害のない子の場合よりも高くなることが指摘されている（五百蔵・山口 , 2014）。その背景の一因として丸山（2011）が、障害のある子の母親は、社会における認識・現実的対応両面にて育児・教育のための資源として位置づけられてきた側面が大きかったことを指摘しているように、子のために動くのが当然という無言の圧力の下、保護者の努力や熱心さに支援者が頼ってしまう側面があることは否定できない。Mac Keith（1973）によれば、たとえわが子の障害を受容している家族だとしても、両親の悩みが大きくなる時期（crisis periods）として、「I. 障害が疑われたり、障害を理解しなければならないとき。」「II. 就学を決めるとき。」「III. 学校を卒業するとき。すなわち白立できるか、就業できるか、恋愛や結婚ができるかなどの心配。」「IV. 親が年をとったとき。すなわち親の老後・死後の子どもの将来についての心配。」の大きく４つの時期がある。

新美・植村（1985）は、自閉症児と知的障害児の加齢に伴う母親のストレスの推移を比較したところ、ほとんどすべての尺度において、知的障害児を育てる母親よりも発達障害児を育てる母親のストレスが高く、学齢到達後にその差が著しいことを明らかにした。さらに田宮・大塚（2005）は、発達障害をもつ子どもたちは多くの場合、親の側からすると「育てにくい子」であるが、そのアンバランスさの理由がなかなかつかめず子どもとの関係もとりにくいことや、親子で周囲の人間から非難されやすいことなどの背景から生じるストレスにより、母親自身が絶えず不安でイライラし、親子で悪循環に陥るといったことが少なくないことを指摘した。あわせて、なかでも卒業・進学は、発達障害児の保護者にとって、とりわけ精神的に不安定になりやすい出来事であることも指摘している。宮原他（2002）も、就学を期とした crisis periods における

＊弘前大学教育学部学校教育講座（特別支援教育）
Department of School Education (Special Needs Education), Faculty of Education, Hirosaki University

両親の葛藤が大きく、その専門的助言やソーシャルサポートなどが重要であることを論じた。子どもの就学に際し保護者が最も依拠している価値観は「子どもが楽しく笑顔で学校生活を送れるか」であるといわれるものの、保護者にとっては、わが子の入学を地域の通常の学級にするのか特別支援学級にするのか、あるいは特別支援学校にするのか、といった子どもの将来の方向性を大きく左右する価値判断と選択を迫られる重要な決断になり、その心理的負担感は大きい（渡邉 , 2012, 2014）。

このような親子ともに大きな決断や選択の岐路となっている場面で、支援者にはどのような支援が求められているのだろうか。そこで本研究は、発達障害児を育てる保護者のナラティブな語りを通して、どのような育児観を背景に、子どもの中学校進学をめぐってどのような心情を抱くのかを探るため、その様相を定性的に明らかにすることとした。

２．研究の方法

２．１．研究協力者

本研究では、201X+1年より中学校への進学を控える小学６年生女児（以下、CH）の母親であるＰ（以下 PA）に研究協力を依頼した。

PA の家族構成は、PA・PA の夫・CH（小６）・CH の弟（小３）・CH の妹（小１）の５人家族である。PA は30歳台後半、北東北地方の医療職に就いていたが、201X-1年度は CH の療育を理由に休職し201X 年４月に復帰している。

CH は、幼少時から登園・登校渋りがあったとのことだが、教頭のすすめで201X-3年に受診し、気分障害などが疑われたものの、結果的に自閉スペクトラム症のみ診断がある。201X-2年の夏から本格的に不登校になり、201X 年４月から在籍を通常の学級から自閉症・情緒障害特別支援学級に移している。201X-1年３月時点で行われた検査結果は、児童用 AQ（Autism-Spectrum Quotient）が26、WISC-III では FIG108、VIQ116、PIQ97であった。

２．２．研究協力者

調査時期は201X 年５月中旬～７月中旬頃のうち、PA の都合のつく時間帯で、１回当たり１時間程度、計７回のインタビューを行った。

インタビューは PA 自身の現在の心情や CH の就学に関する自由な語りを尊重するため、非構造化インタビューを採用した。そのため、無用な刺激となる掲示物等がない閑静な室内で、適宜世間話も盛り込むなど、PA がリラックスした状態で発言ができるように意図し、終始和やかな雰囲気づくりに努めた。インタビュアーは PA・CH 親子と201X-1年より面識をもち互いに気軽に話せる程度の一定水準のラポール形成に努めた上で、インタビューに臨んでいる。

２．３．分析方法

本研究では、ボイスレコーダーで録音したインタビュー内容の逐語録を作成し、それを基礎資料とした。

先行研究を参考に質的記述的研究デザインが採用され（鈴木 , 2018; 増田 , 2018）、基礎資料の逐語録は、挨拶や PA の近況、世間話など明らかに本研究の趣旨からは不要な発言のみ除外し、それぞれの語りの一文を意味内容が損なわれないように抽出ししたものを「*1次コード*」とした。その後、1次コードを要約したものを｛*2次コード*｝、さらにそれぞれ類似性でまとめて〈３次コード〉、【サブカテゴリー】と意味内容の類似性を検討しながら分析することを繰り返し、最終的に《カテゴリー》に集約した。

分類や解釈においては、適宜第三者の助言を仰ぐとともに、質的研究に精通した専門家からのスーパーバイズを受けて分析・解釈を進めた。

調査協力者には、プライバシーの厳守、研究の趣旨、内省ノートの閲覧やインタビュー内容の録音、分析手順や結果の公開といったデータの扱いについて説明し、全ての事項に同意する意思確認を書面にて慎重に行い、かつインタビューの実施直前も同意の確認を求め、全てに協力の了承を得た上で研究を実施した。

３．全体の結果

保護者の語りから、3722の「*1次コード*」が抽出された。これらを要約し、684の｛*2次コード*｝、52の〈３次コード〉、16の【サブカテゴリー】が形成され、最終的に５つの《カテゴリー》が抽出された。すなわち、≪子どもの就学・将来≫、≪子どもの不登校≫、≪子どもの障害≫、≪母親としての自己≫、≪人的資源≫である（表１）。なお PA の発言を引用した際、著者による注釈を（　）で補足している。

４．≪子どもの就学・将来≫に関する詳細

≪子どもの就学・将来≫については、分析対象の全コード数の約34% に該当し、保護者の語りの中で最も多く語られた内容であった。

そのなかでも、PA の語りとして目立ったのは【進路選択における保護者の思い】であった。なかでも、

表１　カテゴリー表

≪カテゴリー≫	【サブカテゴリー】	＜３次コード(集約した{２次コード}の数)＞	＜３次コード＞定義
子どもの就学・将来	進路選択における保護者の思い	就学先選択における困難・焦り(14)	CHの進路が簡単に決まらないことへのPAの焦り
		子どもの就学先を選択することへの責任(17)	PAが夫とCHの進路を決断する琴への責任の重荷
		就学先選択に対する不安とその解消(4)	CHの進路選択に対するPAの不安とその解消のための手立て
		CHの将来に関する保護者の思い(21)	CHの将来に関して抱くPA夫婦の思い
		他者からの就学に関する情報(9)	他者から受けた就学に関する助言・情報一般についてのPAの思い
	子どもの就学に向けた保護者の行動	CHの就学に関する予定(19)	CHの中学校就学に向けたスケジュールについて
		X特別支援学校での教育相談(17)	X特別支援学校で行われた教育相談での様子についてのPAの思い
		X特別支援学校の見学の様子(10)	X特別支援学校で行われた教育相談以外の様子についてのPAの思い
		経験することの大切さ(8)	PAが実際に行動を起こし経験することで得られた充実感
		就学先の選択肢の探求(14)	CHの進路の選択肢についてのPAによる探求・探索
		その他の学校の見学の様子(5)	X特別支援学校以外の学校見学したときの様子についてのPAの思い
	就学のための選択肢の探求・気づき	保護者が助けられた教師からの対応・助言(14)	PAが助けられたと感じたりCHの変化を促したと感じた教師からの対応・助言
		特別支援学校の期待・魅力(17)	PAが抱く一般的な特別支援学校の期待・魅力
		就学先の選択肢の障害種による相違(5)	CHの進路として考えた校種・学級の特性についてのPAの印象
		CHの就学先への興味(11)	CHが進学について考えた様子
		就学先に関するPA・CH双方の意見の一致(2)	PAとCHの進路に関する意見の一致
		通常の中学校就学への考え(9)	PAが抱く一般的な中学校進学への考え
	制度の手続きに対する思い	就学先決定の流れ(20)	就学指導や就学基準といった就学先決定に至る流れに関するPAの認識
		愛護手帳取得のための医師面談と知能検査(14)	愛護手帳取得のための医師との面談や知能検査の手続きに関するPAの認識
		特別支援教育の存在の無知(4)	PAが特別支援教育の存在を知らなかったという実感
子どもの不登校	子どもの学校生活	CHの学校生活の様子(12)	CHの学校生活の様子
		CHの学校生活での苦悩(3)	CHが学校生活で感じていた苦悩
		CHのうけた友達の優しさ(3)	CHが友達からうけた好意的働きかけ
		転籍した特別支援学級での困難(20)	転籍した特別支援学級でのCHのトラブル
	子どもの登校について	CHの登校状況(25)	CHの登校意欲や登校状況
		毎朝の離れづらさ(12)	毎朝母親から離れようとしないCHの様子
		CHの登校渋り・不登校に対する思い(17)	CHの登校渋り・不登校に対するPAの思い
		不登校に対する両親の対応(13)	学校に行けないCHに対する両親の戸惑いや諦め、対応
	不登校に対する学校の対応	CHの登校渋り・不登校への学校の対応(20)	CHの登校渋り・不登校への学校の対応について
		学校の対応を受けての保護者の心情(10)	CHの登校渋り・不登校への学校の対応を受けてのPAの保護者としての心情
子どもの障害	子どもの障害の診断をめぐる葛藤	診断をめぐってのPAの葛藤(12)	CHの障害の診断をめぐってのPAの葛藤
	子どもの障害・困難	CHの行動・感覚の特性(22)	CHの気分のムラや固執行動、感覚過敏などの特性
		CHの障害からくる育てにくさ(17)	現在・過去にPAが抱いたCHの障害に起因する育てにくさの印象
	子どもの障害に伴う保護者の心情	PA自身の障害理解への努力(19)	CHの障害についてのPA自身の理解やそのための努力
		他児と比較して抱くPAの無力感や悔しさ(9)	CHと他児とを比較して抱くPAの無力感や悔しさ
		兄弟との比較からみえるCHの困難(7)	CHとCHの兄弟との比較からみえるCさんの困難についてのPAの印象
	子どもへの評価	CHへの評価(25)	CHに抱く好意的・否定的評価
母親としての自己	保護者自身の育児・親としてのふるまいのふりかえり	PAの育児経験の客観視(20)	PAの育児経験を回顧的に客観視
		PA自身の育児への後悔・自責(42)	PAの育児への後悔・自責、過去の受け入れがたい思い
	育児と仕事との兼ね合い	育児と仕事の両立(11)	育児と仕事の両立をめぐるPAの思い
		仕事への考え(5)	PA自身の仕事への意欲や考え
人的資源	相談できる存在の必要性・探求	相談できる存在の必要性 (18)	PAにとっての相談できる存在の必要性・探求
		教師への信頼・感謝(14)	見学や相談も含めCH が関与した教師へのPAが感じた信頼・感謝
		PAを支えてくれた専門家(16)	PAを支えてきた専門家へのPAの思い
	家族への思い	CHの同胞に対する肯定的な評価(21)	CHの同胞に対するPAの肯定的な評価
		CHの同胞が抱える問題(9)	CHの同胞が抱える問題についてのPAの認識
		CHとCHの同胞との関係(14)	CHとCHの同胞との関係についてのPAの認識
		CHの同胞に対するCHの特性理解の促し(8)	PAがどのようにCHの同胞に対するCHの特性理解を促したか
		PAの夫の父親ぶり(9)	PAからみたCHの父親について
		家族の気持ち(4)	PA・父親・CH・同胞が抱く現時点での家族の気持ちについてのPAの認識
	地域との関係	PAを支えてくれた非専門家(9)	PAを支えてきた非専門家へのPAの思い
		CHへの周囲の無理解(4)	CHに対する周囲の無理解

「*早いうちからあちこち見て歩いて、本当にそうなのかっていうのを、こちらが希望をちゃんと面接で言わなきゃいけないと思って、4月から焦って見学してる*」という＜就学先選択における困難・焦り＞や、「*親がちゃんと選んであげないとダメなんだなって思った*」という＜子どもの就学先を選択することへの責任＞がうかがえる発言が多く確認された。一方で、＜CHの将来に関する保護者の思い＞のなかで、子どもの就学先を選択することに対して抱くネガティブな感情や重圧の発生要因として、情報が無かったり仕組みがわからないことが大きく作用していたことが語られた。何気ない＜他者からの就学に関する情報＞によって混乱したこともあったようである。

それらの＜CHの就学に関する予定＞をめぐるネガティブな感情は、【子どもの就学に向けた保護者の行動】によって次第に解消されていく。＜就学先の選択肢の探求＞として、＜X特別支援学校の見学の様子＞や＜その他の学校の見学の様子＞を実際に確認して＜経験することの大切さ＞を再認識するとともに、＜X特別支援学校での教育相談＞での教師の助言に納得できたことで＜就学先選択に対する不安とその解消＞につながっていく様子は、「*前はこの先どうなるんだろうって不安だった*」が、「*見学に行ってみたらわからなかったことが一つずつ明確になってきてさっぱりした*」という発言からも読み取れる。

不明からくる混乱やネガティブ感情が明確になることでポジティブに転じている様子は、【就学先の選択肢の探求・気づき】からも見受けられる。つまり、PAがX特別支援学校を見学した際、「*CHは音読しましょうって言って音読はできないけど、難しい本を読むことはできるし、勝手に難しい四字熟語を読むこともできるし、絵だったら2時間集中して描けるしっていうのを話したら、そこからやっていきましょうっていうのがすごく細かくて、今までの学校関係のお話しの中では一番しっくりきた説明だった*」とふりかえっているが、このときの教師の提案がPAにとってはCHにはどのような支援をすればいいかの道筋が明確になり、いわば＜保護者が助けられた教師からの対応・助言＞としてPAの漠然とした不安の解消につながっている。

そもそもPAがCHにとっての最適な場所を探していく一環として見学という行動をとることで、「*この度中学校を探さなきゃいけないから、選択肢を自分（PA自身）で並べていって、よりよいところはどこかって一生懸命探している*」なかで、「*だけどCHみたいな（発達障害の）子は、行ける場所を探すところから始まって、いろいろやれることを増やさなきゃって増やしてきた*」という＜就学先の選択肢の障害種による相違＞に気づいていく。さらにX特別支援学校での教育相談は、PAとCH双方に対し進路選択へのポジティブな考え・心情を生起させた一因となっていると考えられる。例えば「*X（特別支援学校）のほうが（CHにとっては）スモールステップで成功体験を積ませてもらえるとわかった*」や、「*中学校でこのくらいのことができないといけないとか聞いてきて、ひとりで朝会に行けるとか、何時間目終わって次荷物もってどこ行きますとかその程度ができないと（中学校の通常の学級で過ごすのは）難しいと思った*」、さらにはその後「*最初は（CHが）すごいY中学校がいいって言いだしてどうしようかなと思ったけど、X特別支援学校いいと思わない？って言って、去年くらいから二人の意見が一致するようになって、私もそういうふうに考えられるようになってきた*」のように、見学を機にPAとCHとが親子で＜CHの就学先への興味＞や＜通常の中学校就学への考え＞、＜特別支援学校の期待・魅力＞について話し合うことで、＜就学先に関するPA・CH双方の意見の一致＞に向かったことで、さらに悩みが解消に向かっている。そこには、PA自身も知らなかった特別支援学校という世界の実際と中学校での生活が我が子の実情とかみ合いにくい現実、これまでの小学校を否定するわけではないが明らかにそれとは異なっている特別支援学校のきめ細かな対応への驚き、我が子にとって特別支援学校での経験が今後の成長に大いに期待を抱かせたこと、そして、その対応への納得と適切な助言を行った教師に対するラポールが形成されているPAの様子がうかがえる。

一方で、PAが実際にとった見学・相談といった具体的な選択肢の探求行動は、【制度の手続きに対する思い】としてネガティブな感情ももたらしている。PAは、「*私たちは通常の中学校に入って、通常の高校を受験してとか、小学校から中学校は学区だからここに行ってとかやってきたけど、その時に特別支援学校もあったことや、どういう人が行くとか基準もわからない*」などの＜特別支援教育の存在の無知＞に関する発言も散見された。そのようななか、就学先候補の見学や相談のなかで、発達障害症状こそ問題だが知的障害の合併がないCHの場合、法規上も特別支援学校への就学基準を満たさないこととなり、障害種が知的障害となっている特別支援学校への就学に際し＜愛護

手帳取得のための医師面談と知能検査＞の手続きが求められることを知る。それがPAにとって、「*愛護手帳の有無は基準として明記されていないが実績として必要だということに疑問を感じる*」「*行きたいのに行けないのかってすごく不安だった*」のように、CHが現行の学校教育制度から弾かれているのではないかという＜就学先決定の流れ＞への不安視や負担感の大きさが強くうかがえた。さらにその後愛護手帳取得の有無は法規上問われないものの実際には運用上愛護手帳取得が求められることを知ったPAの「*そういうお子さんをもたなければ知る必要ないことかもしれないけど、それを知らないって大変だなって思った*」や「*一人ひとりがこんなに努力してるのかって思った*」の発言は、これまでほとんど接点のなかった特別支援教育の存在を知るために、保護者の並みならぬ努力が必要となることを象徴している。

５．≪子どもの不登校≫に関する詳細

≪子どもの不登校≫については、分析対象の全コード数の約20%に該当した。

PAは【子どもの学校生活】についての自らの語りのなかで、＜CHの学校生活の様子＞とともに、「*本人は３年生の頃学校で過ごすのがつらかったと言っている*」などの＜CHの学校生活での苦悩＞も発言した。CHの通常の学級から特別支援学級への転籍によって、「*移ってみて本人が同級生の男の子に何もがんばってないじゃないかみたいなことを言われて傷ついちゃって、行けなくなってしまった*」のような＜転籍した特別支援学級での困難＞をはじめとするネガティブな経験が先行して語られた。その反面、ポジティブな経験もあり、例えば、「*今回の運動会でも、練習日に学校に行ったら前の学級の子たちが学級旗を作っていて、『CHも来な』ってすぐいれてくれて、そういうところがいままでの友達がきめ細やかだったんだなって思って、「CHまた来るんだよ」とかって言ってくれて、今までの友達の優しさを痛感した*」などの＜CHの友達の優しさ＞を改めて感じていた。

【子どもの登校について】のPAの葛藤は大きかったことが推察される。＜CHの登校状況＞は、「*小学校入学後、初めは玄関で別れられていたが、段々教室までついて行かなければならなくなった*」「*自閉以外でも、母子分離障害や不安症かもと医師には言われたが、それでも学校に行っていた*」の発言のように、＜毎朝の離れづらさ＞を基本とした登校渋りが次第に深刻化しつつも登校自体はできており、「*送って行けば大丈夫だから、それほどのことでもない*」のようにさほど心配していていない様子がうかがえた。しかし小学４年のときに「*暴れてもう行かないってなったから、小４の後半はほとんど学校に行けなかった*」「*行事には参加するときもあり、行ける兆しがあるのかと思いきや春にまた調子が悪くなった*」「*お母さんと一緒じゃないと行けない*」のように不登校が顕著になってくると、PAは仕事の合間を縫ってCHを学校に連れて行っていたようだが、「*まさか行けなくなるなんて思ってなかった*」や「*ショックだし、そうなってしまったかという思い*」の発言から、＜CHの登校渋り・不登校に対する思い＞として大きな衝撃を受けたことが推察できる。この状況に対しPAは「*（登校しないとするCHのことが）理解できない*」なか、「*行く行かないの押し問答の日々*」「*（CHの）気持ちがわからないから聞くことしかできない*」といった決め手に欠く自身の対応にもどかしさや無力感を感じながらも、「*学校に行かなくなったら大変だと思って朝、半ば強引に学校に連れて行くこともあった*」とどうにかしなければならない責任感に追われていた。だが次第に、「*CH自身も自分の気持ちよくわからない様子だった*」ことや「*最初は無理に学校に連れて行っていたが、暴れる姿を見て、もう無理に連れて行かないと思った*」という諦めにも似た戸惑いとしての＜不登校に対する両親の対応＞が形成されていった。

だがその後PAは、前述の＜CHの友達の優しさ＞を感じるなかで、「*でも、行事とかに行くと友達と交流してすごく楽しそうにしていて、相変わらず友達も優しくて一緒に遊んでくれて、決して家に一人でいることだけがいいんじゃないんだって思って、やっぱり同じ歳の子とふれあいながら生活してほしいなと考えたので、家じゃなくて支援学級に行こうと思った*」と、CHが社会とかかわることこそ大切だと再認識する。これらのような【子どもの学校生活】のふりかえりは、前述の≪子どもの就学・将来≫を検討し判断していく際の参考となっているものと推察される。

PAが最も感情を高ぶらせ涙ながらに語ったのは、【不登校に対する学校の対応】、なかでも、CHが登校できたりできなかったりしていた小学５年のとき、学校からの声かけを機に教頭や担任、学年主任などとCHについて話し合う機会が設けられたときを中心に＜CHの登校渋り・不登校への学校の対応＞をふりかえった際だった。学年主任から「*本人が行けないからって行けないままでいいんですかって言われ*」、PA自身は「*もうどうしようもできない*」「*行ける行けな*

いが積み重ねによるものではないと思っていたから、どうせ行けないならしょうがないと思っていた」などのネガティブな心情を率直に述べたという。しかし「*(学校側が自分の)話を聞いてくれて、不登校児のためにすごい考えてくれて、ちゃんとステップを積んで、目標を立てて頑張っていきましょうって(言ってくれた)*」ことによって、「*CHが今考えられないからって、お母さんが考えなくてもいいんですかって言われてびっくりしたけど、すごく真剣だなと思った*」や、「*(学年主任の一言は)一瞬すごいショックだったけど、一生懸命考えてくれてるから言ってくれたんだろうなと思って、すごくありがたいと思った*」などのポジティブな心情が語られ、＜学校の対応を受けての保護者の心情＞に変化が生じたようである。ただ給食だけ食べるためだけに登校していたときも積極的に「*何の進展もあるように思えないと先生方に相談した*」り、それらをうけて教師から「*お母さんが一生懸命学校に来るから一緒になって考えていきたいと思います、と言ってくれて、学年の先生も3人中2人が話し合いに参加してくれていた*」など教師の対応も更に手厚くきめ細かいものになっていったという。登校渋りや不登校といった保護者にとってはネガティブに受け止めやすい場合も、教師の対応とその対応を保護者がどう受け止めるか次第で結果が左右することが改めて確認されたといえる。

6．≪子どもの障害≫に関する詳細

≪子どもの障害≫については、分析対象の全コード数の約16%に該当した。

PAは、CHが小学校3年で障害診断されたことをふまえ、【子どもの障害の診断をめぐる葛藤】を露わにした。当時担当の医師に「*小3で診断を受けて遅いと言われたことには今も引っかかっている*」とする一方、「*診断が遅かったのかもしれない、もう少し前に診断されていれば早くから療育をして小学校に行けている例もある*」と正当化と後悔とで一転二転するような＜診断をめぐってのPAの葛藤＞がみられた。

CHの抱えている【子どもの障害・困難】は、癇癪をはじめとする気分のムラや「*現在も着れる素材と着られない素材がはっきりしていて、選んでいる*」など障害特性の背景にあると考えられる＜CHの行動・感覚特性＞が目立つ。PAにとってこれらは、「*こだわりが強くて大変な子ではあったけど、当時は対応していくしかないと思っていた*」「*CHは理解できない言動が多く、今思えば育てにくさがあった*」などの＜CHの障害からくる育てにくさ＞として語られていたが、義務感・責任感として表現されたのはCHが第一子であったことが関係しているだろう。つまり初めての育児のなかで、育児がこんなものなのかと考え、障害との関連には思い至らなかった可能性は高い。

ただ障害が診断として明確になるか否かにかかわらず、PAが抱いた【子どもの障害に伴う保護者の心情】は複雑だったことが読み取れる。「*(小学5年生のとき)何回か学校に付いて行ったときに、やっぱり教室に入って20～30分しかいられなくて、続かないんだなということが行ってみてわかった*」のようにPA自身がCHの困難・現状を直接目の当たりにしたことで、「*(小5の夏くらいから、発達障害児の)親の会が主催してる研修会に参加するようにして*」発達障害の知識を得ようとしたり、「*(CHは精神的にも不安定さがあるから(学校生活のなかで成功体験を積むのが)難しい*」「*本当に最近になってCHの生きづらさがわかってきた*」「*最近になっていろいろ積み重なっての行動なんだと思えるようになったが、以前は発作のような一時的なものだと思っていた*」といったCHの生きづらさを理解しようとする行動をとるようになるなど、＜PA自身の障害理解への努力＞が見受けられた。

その一方で、否応なしにCHの同級生や兄弟の様子も目にしているため、わかっていても発達や能力の差を感じてしまうことが多いようである。それらは「*兄弟と比較して初めてCHの困難さがわかった*」などの＜兄弟との比較からみえるCHの困難＞、あるいは「*他の6年生の子の成長が目覚ましくて、やっぱり中学校に行くようにどんどんとなるんだってことが目に見えて分かって、やっぱり比較してしまう*」「*就学のことを考えてると、みんな通常の中学校に行くんだろうなって思うと、行けないんだなって差を感じる*」など＜他児と比較して抱くPAの無力感や悔しさ＞として表現された。これらはPA自身がCHの障害・困難を理解しようと努力し学校へ足を運ぶ行動を重ねたなかで、CHの状況が理解できるようになったからこその心情と考えられる。「*もしかしたら兄弟を連れて学校に行ってくれたのかなって思うと、ほんとに悲しいというか、悔しい*」と涙ぐむ場面からも、絶対に揺るがない現実と理想の差に悔しさを感じていることがうかがえる。

それらの葛藤をふまえてPAは、冷静に【子どもへの評価】をしようと努めている。「*普通の子はつらくても学校に行くがCHにはそれを乗り越える力はない*」「*(CHが)最近変わってきたなと思うところは、*

割と冷静に物事を見れるようになってきたところ」など現状の＜ CH への評価＞を見極めている。一方で、「*前は本当に、ちゃんとすればできるのにって思ってた*」「*CH は自立した様子が見られず、ずっと甘えてくることが許せなかった*」と以前は CH への期待となかなか思うように成長する様子が見られない子どもに対してネガティブな感情を示していたことを語った。

７．≪母親としての自己≫に関する詳細

≪母親としての自己≫については、分析対象の全コード数の約11% に該当した。

PA は【保護者自身の育児／母親としてのふるまいのふりかえり】として、大まかに２点を語った。一方は、「*これは普通の女の子もそうかもしれないけど、女同士だからか、ぶつかり合って、ぶつけ合っている*」や、「*もちろん一生懸命 CH の手助けはするし、最近は下の子たちもあとから蓋をあけたら困ったことにってならないように親として気にかけるようにしている*」のように、＜ PA の育児経験の客観視＞である。他方は、「*CH が自分に嫌がらせをしているんじゃないかと思って、（小学校の）１年生なのに甘えさせてあげられなかった*」「*だから、あの人なりに頑張ってたから、抱っこしてあげればよかったって思う*」「*無理して学校に行ったせいでトラウマができてしまったことに気付けなかったし、私の責任だと思う、C に申し訳ないと思う*」など＜ PA 自身の育児への後悔・自責＞であった。PA は母親としてどのように子どもたちとかかわり、気にかけているかなどを考えて子育てをしているにもかかわらず、CH の幼少時に彼女なりの頑張りを認めてあげることができず甘えさせてあげられなかったことを軸に、自身の育児にネガティブな後悔や自責の心情を抱いていた。PA が障害の受容や理解に積極的に努めているとしても、自らの育児の回顧がネガティブに表出していることからも、CH の障害や不登校をめぐる葛藤が克服されているようにみえたとしても、当人にとっては現在進行形であることがうかがえる。

あわせて、さらに PA は有職者であることから、【育児と仕事との兼ね合い】も語られている。＜育児と仕事の両立＞のために「*帰りも遅いことが多くて、C が大変なのを何とか乗り越えてみよう、寝て朝を迎えて学校に行かせようってことしか考えてなかった*」「*仕事で帰りが遅くて生活リズムが乱れていたところもあって、そうすると CH が（何をすればいいか時間を）もてあましちゃう*」ことが続き、休職に至った。復帰後も「*今も全部ギリギリでやっていて、平日 CH に付き合っている分は土曜日に埋め合わせしている*」「*最近は職場にもお話しして朝は10時くらいまで学校にいて、お昼も一旦家に帰って、夕方職場に戻って、パパにも協力してもらっている*」などの工夫を考えている。仕事と両立することで「*仕事に行ってるとわりと仕事に集中しているときもあるから、そういう意味では必要だと前から思っていた*」「*疲れるなあと思うけど、家にいても同じかなと思って、外に出て気がまぎれたほうがいいかなと思う*」と＜仕事への考え＞について気分転換としてとらえてもいた。「*ずっと家にいてずっと CH の面倒見てるのがやっぱりつらいときもある*」のように、CH への対応は嫌悪することではないにせよ負担感が大きいため、発達障害児の事例におけるワーク・ライフ・バランスの必要性（福丸 , 2008）はより考えられなければならないことといえる。

８．≪人的資源≫に関する詳細

≪人的資源≫については、分析対象の全コード数の約18% に該当した。

PA は、「*親とだけずっといても二人とも泥沼にはまっていく気がして、誰かの手を借りなきゃだめだってすごく思った*」と語り、現在の自分にとって【相談できる存在の必要性・探求】を強く訴えた。「*良い人と出会えばいい情報を得られるし、CH にとってもいいことだから、良い人を求めてどんな所でも行こうって思った*」「*CH の見学に行く心境として相談事業とかすごいたくさんあったから人を探しに行こうって途中から考え方を変えた*」のように、現状打破のためのきっかけとしての＜相談できる存在の必要性＞を求めていたように思われる。また、前述の X 特別支援学校での見学・教育相談や小学校での CH への不登校対応は、「*ほんとにさすがって感じ、X（特別支援学校）の先生に本当に救われた*」のように、効力ある支援として機能したように感じていたこともあり、PA は＜教師への信頼・感謝＞を強く感じていた。

だがそれらもポジティブにだけ考えていたわけではなく、「*制度化するっていうのは難しいと思うけどもっとワンストップだといいと思う、相談支援専門員の方が付いてくれるのはとてもありがたいけど、就学まで面倒見るわけじゃないし、結局親がマネージャーにならなきゃいけない*」のように、＜ PA を支えてくれた専門家＞には、医療や福祉などそれぞれの領域の専門家にそのスペシャリストとしてそれぞれの領域に

関する相談はできても、全ての領域を網羅している相談相手、いわばジェネラリストとしての専門家がおらず、不便さや諦めを感じている。

PA は【家族への思い】についても語っている。＜家族の気持ち＞が「*時間とともに家族もＣの障害を受け入れつつある*」と語る。ただ CH の障害特性に関連する癖（飛び跳ねて歩く、口が開いているなど）に対する夫の対応について、「*（CH の癖に対し）父親がすごく気にしている*」「*私はしょうがないじゃんって感じで指摘するのが嫌だけど、たしかになと思うところもある*」のように、＜ PA の夫の父親ぶり＞に対する PA の思いが語られた。このあたりは夫婦間の意見の相違というよりも、ときに考えをすり合わせつつも互いの意見を尊重しあっている関係と読み取るべきだろう。

PA が気にしているのは同胞への思いである。「*妹が私に手紙を書いて渡しに来たら、CH がちょうど通りかかって、妹はすごい嫌がってたのに手紙を取り上げてぐしゃって捨てて、妹が怒って叩いたりして、CH が泣いて逃げるっていうことがあって*」のように＜ CH と CH の同胞との関係＞を兄弟喧嘩のエピソードを軸に語っている。一方、「*弟は『なんでお前だけ学校行かないんだよ』とか言うときもあるけど、寝る前に『C が生きていけるか心配』と言っていた*」など、同胞が幼いながらも CH を心配している様子についても＜ CH の同胞に対する肯定的な評価＞として語っていた。この肯定的評価は CH の同胞関係抱けなく「*CH が大変だったのを、下の子たちを抱っこすることで癒されていた*」のように PA との関係としても心の支えとなっていたと読み取れる。

その反面、「*私が仕事休みの日に限っていつも行き渋りが始まる*」のように、＜ CH の同胞が抱える問題＞も語っている。特に妹の登校渋りについては、「*妹が先週風邪で少し休んじゃって、行きたくないって言いだしたから、この子も行けなくなるんだろうかってすんごい不安だった*」「*月曜日の朝ちょっと行きたくなさそうな妹を車で学校に送って行ったら、学校に入れないと言われて、教室までついて行ったら歩きながら泣き出して、教室に入れなくて、教室に一緒に入ることになったとき CH のことがフラッシュバックしてきた*」のように語り、結局妹の行動が CH のそれと同じではなかったにせよ、CH の登校渋り・不登校が PA にとってかなり大きな心理的負担だったことをうかがわせる。同胞が CH と同じように登校したくないと行動することを回避するような PA の努力として、「*CH が学校に行かないことに関して、弟の理解を得ようとし*」たり、「*ちゃんと学校行けるってすごいんだよって言って泣いてるけど（CH を）学校に連れて行った*」ように、＜ CH の同胞に対する CH の特性理解の促し＞が認められるのも、それら負担感の大きさの裏返しであろう。また同時に、同胞それぞれにも大なり小なり問題は起こるが、困難に直面してもそれを乗り越えられてくれていることへの PA の感謝の念があるとも考えられる。

【地域との関係】にも両義的な関係が確認される。「*職場の人にも理解してもらって一緒に連れて行っている*」「*（イベントで）知っているお母さんたちすごく優しくしてくれて『CH よく来たね』ってみんな言ってくれるから、にこにこしながら父兄と一緒に楽しんでた*」のように、既知の“ママ友”関係や職場の同僚、PA の同窓、研修会で知り合った参加者など＜ PA を支えてくれた非専門家＞の存在や受容してくれる状況が、PA にとっては専門家の支え同様に、心の支えにつながっていた。

反面＜ CH の周囲の無理解＞にも PA は傷つけられている。CH の行動が「*（私が育て方のせいじゃないと思っていることに関して）すごく反発をかって、反省していないというふうに受け取られる*」や、「*『私のせいだったかもしれません。すみません』って言った方が世間受けがいいのがすごく嫌だけど、深刻さに欠けると言われる*」のように、いくら親が「子どもの障害は自分のせいではない」と思うようにしていても、その思いに対して「子どもの障害＝親のせい」という考えをもって反感を覚えるような人たちと接することもあったようである。CH の障害が、車椅子や補聴器などを使用しているわけではなく外見的にわかりにくい特性であることで、その言動が周囲の人々に理解されないことこそ我が子の生きづらさであると PA が感じていたことがうかがわれた。

９．まとめと今後の課題

このように、中学校進学を機に、親子ともに大きな決断や選択の岐路となっている場面での心情を、発達障害児を育てる保護者のナラティブな語りを通して、定性的に明らかにすることを試みてきた。PA の語りから≪子どもの就学・将来≫、≪子どもの不登校≫、≪子どもの障害≫、≪母親としての自己≫、≪人的資源≫の５つのカテゴリーに集約されたものの、いずれのカテゴリーに関する詳細にも、CH や CH の将来に対し、変化への期待に代表されるポジティブな感情と

大きな不安や周囲の心ない働きかけに伴う生きづらさといったネガティブな感情とが同居された、アンビバレントな心情として表現されていた。母親を調査協力者としているこの結果は、柏木・若林（1994）とも重なるものである。

発達障害児の保護者は、進路選択という子どものライフイベントにおいて、「子どもには障害がある」という覆せない現実への悲しみ・悔しさといったネガティブな感情が再燃している。さらに本事例では、CH が不登校状態であり、「中学校か、特別支援学校か」という PA の学校選択に関する問いのは、「我が子が通い続けられる居場所はどちらなのか」という希望や願いが強調されているように見受けられる。そして、進路選択や就学という健常児の多くにとって当たり前のような通過点において、我が子は同じではないという現実を突きつけられている。そのようななかで≪子どもの不登校≫を回避できる≪子どもの就学・将来≫の確保に PA の保護者としての強い思いと並々ならぬ努力が認められる。

一方で、PA が語ったように、保護者が今までの人生において自身が経験してきた小中高以外の特別支援学校については未知である可能性が高い。1980年代～1990年代にかけて義務教育を受けてきた世代が経験してきた障害者政策は「児童の権利に関する条約は、可能な限り統合された環境での教育が保障されるべきであると明記していながら、原則分離の教育形態は維持され」ており（文科省 , 2010）、障害児とのかかわりが希薄であり、障害児がどのような教育を受けていたのか知る余地がなかったことが考えられ、不安の大きさがうかがい知れる。

このようなアンビバレントな心情は、進路選択で再燃した周囲からの阻害因子としての対応を根底にしつつ、自分が今まで経験してきたレールには当てはまらない我が子に一からレールを作ってあげなければならない不安や戸惑いからもたらされるネガティブな心情と、置かれた現状の中で前を向いて進んでいるうちに見えてきた期待や魅力、周囲の人的資源からの好意や支援などから受けたポジティブな心情とが、短いスパンの中で揺れ動いて形成されていったと思われる。それは決して強固な心情とは言い難く、わずかな衝撃で状況が激変してしまうような、綱渡りのごとく危うい心理状況にあることが読み取れる。母娘関係を母のライフストーリーからまとめた東海林（2013）は、母娘関係には「独立と依存のアンビバレンス」ともいえる複雑な関係性があり、母娘が物理的距離を保てても心理的距離を適度にとることに難しさを感じていた様相を指摘している。となれば、発達障害や登校渋り・不登校という困難や進路選択というライフイベントは、親子の物理的距離のあり方も含めた心的距離の保ち方という意味でも、根底のアンビバレントで複雑な関係をさらに浮き彫りにしているのだろう。

今後は発達障害児の就学をめぐる保護者の考えや心情について、本研究の範囲外であった、中学校以外の就学、進学例、不登校以外の二次的問題に注目する必要がある。あるいは、発達障害児のその他のライフイベントにも着目し、保護者の考えや心情が更に変化していく過程を縦断的に確認することで、長期的で充実した家族支援につなげることが期待できるものと考えられる。

附記

本研究は、弘前大学教育学部附属特別支援教育センター「知的障害・発達障害児の社会適応をめざした ecological intervention approach に関する実践的研究（平成31年度№0002）」の一部として、弘前大学教育学部倫理委員会の承認を得ているものである。

文献

福丸由佳 (2008): 父母子関係とソーシャルサポート . 無藤隆・安藤智子 (編), 子育て支援の心理学―家庭・園・地域で育てる―. 有斐閣 : 37-53.

五百蔵恵・山口一 (2014): 発達障害を持つ子どもを育てる母親のレジリエンスおよびソーシャルサポートが育児困難感および抑うつに及ぼす影響について . 桜美林大学心理学研究 , 5: 29-45.

柏木惠子・若林素子 (1994):「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み . 発達心理学研究 , 5: 72-83.

Mac Keith, R. (1973): The feelings and behavior of parents of handicapped children. Developmental Medicine & Child Neurology, 115: 524-527.

丸山啓史 (2011): 障害児を育てる母親の就労に影響を与える要因 . 京都教育大学紀要 , 118: 81-90.

増田貴人 (2018): 聴覚障害学生を支援する学生のノートテイカーとしての支援観形成過程―内省ノートの分析から―. 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル , 2: 37-46.

宮原春美・前田規子・中尾優子・相川勝代 (2002): 発達障害児家族の障害受容 . 長崎大学医学部保健学科紀要 , 15(2): 57-61.

文部科学省 (2010): 障害者制度改革の推進のための基本的な方向（第一次意見）. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1295927.htm

新見明夫・植村勝彦 (1985): 発達障害児の加齢に伴う母親のストレスの推移－横断的資料による精神遅滞児と自閉症児の比較をとおして－ . 心理学研究 , 56(4): 233-

237.
東海林麗香 (2013): 成人期の娘とその母親の関係：青年期の娘を持つ女性へのライフストーリー・インタビューから . 山梨大学教育人間科学部紀要 , 15: 339-345.
園田和子・松成裕子・武井修治 (2016): 胎児の発育に影響を及ぼす恐れがあると考えられる妊婦の生活スタイルと心理的特性 . 小児保健研究 , 75(4): 463-473.
鈴木夏葉 (2018): 発達障害児の就学をめぐる保護者の心情ーナラティヴ・アプローチによる検討ー . 弘前大学教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育専攻平成29年度卒業研究 .
田宮縁・大塚玲 (2005): 軽度発達障害児の就学にむけての保護者への支援―S 大学教育学部附属幼稚園の実践を通して―. 保育学研究 , 43(2): 223-232.
渡邉充佳 (2012): 障害児の親にとっての「就学問題」をとらえる視座－先行研究の批判的検討を通じた研究課題の提示－ . 生活科学研究誌 , 10: 157-175.
渡邉充佳 (2014): 自閉症児の就学をめぐる母親の意思決定過程 . 日本教育社会学会大会発表要旨集録 , 66: 474-475.

（2020. 8 .28受理）